

高橋 元球児の不動心スロー



男子やり投げ(上肢障害F46)決勝の2投目を投げる高橋峻也=小玉重隆撮影

陸上 「甲子園の比でない歓声だった」

男子やり投げ(上肢障害F46)の高橋峻也にとって、パラリンピックは人生で2度目の大舞台だ。1度目は、2016年の全国高校野球選手権だった。

3歳の時に脊髄炎を患い、右ひじを動かすことができない。小学2年から打ち込んだ野球では、捕球後に左手のクラブを瞬時に外して左手で送球した。

鳥取・境高3年の夏、控えの外野手としてベンチ入り。甲子園で試合には出られなかったが、試合前にノックを受けた。いつものように送球すると、観客4万6千人の拍手喝采を浴びた。

甲子園を通して高橋を知った日本福祉大の陸上部監督から秋ごろ、「パラリンピックを目標さないか」と声をかけられた。新しい目標ができた。

腕の振りや手を離すタイミングなどが野球と違って難しかったが、競技を始めて約5年で61歳24の日本記録を樹立した。その後も好記録を残し、パリ・パラリンピック代表をつかんだ。

26歳で迎えた最高峰の舞台は「甲子園でも、比べものにならない大歓声だった」。自信のある助走には手応えがあった。59歳76で6位に。やりの角度や姿勢さえ調整できれば、まだ伸ばせると感じた。目標だったメダルに届かず悔しさが残ったが、得たものがある。「初めてでも空気にのまれることなく力を発揮できたのは、大きな自信になった」(佐藤拓生)